

# 千葉歳胤と児玉空々

山口正義

## 一、はじめに

千葉歳胤（一七一三〜八九）は、飯能市虎秀（旧入間郡東吾野村虎秀）出身の江戸中期の天文暦学者です。一方、児玉空々（一七三五〜一八一二）は江戸宿谷氏の五代嘉照で、田安家儒臣であると共に琴学（七弦琴）の最盛期を招いた琴士でもありました。この二人は分野こそ違いますが、旗本の幸田親盈（一六九一〜一七五八）という共通の師を持っていました。

このことを知ったのは、『あゆみ』12号（昭和61年）の山口満氏の「続・宿谷氏の賦―江戸宿谷氏人々の事」を数年前たまたま読んだときです。当時、筆者は歳胤について調べていて、『天文大先生 千葉歳胤のこと』という小冊子を発刊する直前のことでしたから驚きを禁じ得ませんでした。

本稿では、宿谷の地（毛呂山町大字宿谷）から山一つを隔てた虎秀出身の知られざる天文暦学者・千葉歳胤と、宿谷の地にゆかりの琴士児玉空々、そして二人の師幸田親盈の三人について概要を述べ、郷土の歴史を知る一端としたい。

## 二、千葉歳胤

歳胤については文献<sup>(2)</sup>から抜粋して概要を述べます。

歳胤は助之進と称し陽生<sup>ようじやう</sup>と号しました。江戸に出て当時著名な和算・天文暦学者であった中根元圭<sup>げんけい</sup>に学び、元圭亡き後はその高弟幸田親盈に師事し、天文・暦学・和算等を学びました。歳胤は幕府天文方渋川図書光洪<sup>ずしよみつひろ</sup>を助け、独自の計算方法によって日食・月食に関して研究を進め、『蝕算活法率』<sup>かつぽうりつ</sup>『皇俊通暦蝕考』<sup>しやうじゆう</sup>などおよそ三十部百有余巻の書物を残して天文暦術界に貢献しました。晩年は虎秀の山里に帰り、寛政元年（一七八九）三月六日に七十七歳で没しています。その伝系は、関孝和―建部賢弘―中根元圭―幸田親盈―千葉歳胤という流れで、歳胤は和算・暦学では当時一流の系統の中に位置づけられる人物ですが、一般的にはほとんど知られていないようです。歳胤の本姓は浅見氏であり、千葉姓を称した所以<sup>ゆゑん</sup>は不明です。また医を業<sup>なりわい</sup>としたともいわれますが詳細はやはり不明です。歳胤の墓は虎秀にあり、昭和三十八年に飯能市の文化財に指定されています。



歳胤の著書（東北大所蔵分）

さて、歳胤の師や事績、歳胤の性格などについて『増修日本数学史』（明治二十九年初版）は次のように述べています。

「初め数学を中根元圭に受く。元圭没して後ち、その高弟幸田親盈に従つて学びたり。大いに数学および暦学に通ず。竊かに、日官渋川図書<sup>ずしよ</sup>の職務を助けて、大いに補う所あり。実に図書の公務は陽生が内助に依りて、成りたる者なりと云う。蝕算活法率の大著述の如きは、最も著名なる者とす。その他、著書多し。（略）その門に伝ゆる者、凡そ三十部百有余巻、盛んなりと謂うべし。稟性温順、その利を求めず。その功を謀らず。悠悠自適す。これを以て、氏を知る者至つて少し。惜哉、本年（寛政元年）某日卒す。」

稟性温順云々<sup>うんめん</sup>というのは史実的には不明ですが、史料的には佐藤解記の『算家景図』（天保五年…歳胤没後45年）に依るのでしょう。その原文は次のようなものです。

『歳胤 千葉助之進平号陽生

武州高麗郡虎秀村ノ産也阻生ト号初業ヲ幸田新盈親

二事ヲ性穎悟ニ而思ヲ曆数ニ精而終幸田氏ニ請テ学之悉

ク其奥旨ヲ得タリ后古郷ニ歸リ隱而寛政元酉年三月六日

死ス行年七十七才其村ニ葬法名乾道阻生實際は信士居士ト号其子

孫虎秀村ノ農家タリ』 (注) 穎悟ニ才智が優れていること

次に歳胤と交流のあった人物を見てみましょう。

元圭にいつ頃どのようにして入門したかは不明ですが、元圭が亡くなったとき歳胤は二十一歳ですから長い間の師弟関係があった訳ではないでしょう。その後親盈に師事し、師弟関係は親盈が亡くなる宝暦八年まで続いたことでしょう。このことは同年の歳胤の最初の著である『天文大成真遍三條図解』の中で「藤原親盈先生門人平歳胤考著」とあることから推測できます。

師以外では親盈同門の今井兼庭（上里町出身、『明玄算法』等を著しています）、天文方の渋川光洪、それに門人（人名が判明しているのは十八名、その中には本多利明もいます）などを挙げることができます。兼庭について歳胤は、皇倭通曆蝕考の序文で兼庭に計算を手伝ってもらったことや、「兼庭は予の同門也、無双の算士也」と述べ、兼庭の能力を高く評価しています。また兼庭の明玄算法には、歳胤と門人佐木秀俊の問題が掲載されています。これらのことから歳胤と兼庭とは親密な関係にあったのではないかと思われれます。さらに、「本多利明先生行状記」には「今井寛藏兼庭ヲ算学ノ師トシテ：：天文ハ千葉陽生歳胤武州虎秀ノ産、医ヲ以テ業トシ、江戸ニ住ス」ともあります。

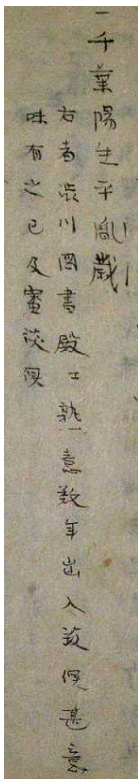
一方、渋川光洪との関係では蝕算活法率にある歳胤の自序や遠藤利貞の後序には「蝕算活法率が」密かに書かされ、公にもされなかった」ことが述べられています。これはどう受け取ればよいのか迷うところであり、今後の課題でもあります。

その他に、当時渋川邸（築地木挽町）には山路主任（著名な和算学者。後、天文方）・之徽父子等が入りしていますが、歳胤もこの仲間に入っています。天明元年（一七八二）藤田権平（定資、著名な和算家、深谷市出身）の著作による『日本算者系』には歳胤のことが次のように記されています。

「千葉陽生平胤歳ママ

右者渋川図書殿ニ熟意数年出入致候甚意味有之已及審談候」

これは歳胤が、光洪・主任・之徽・定資らと渋川邸を中心に交流があったことを伺わせるものでしょう。つまり、歳胤は当時その分野の中央にいたことを示す好史料です。



『日本算者系』述の歳胤の記述  
(日本学士院)

歳胤の業績の一つは『蝕算活法率』や『皇倭通曆蝕考』などにみることができます。

日本独自の曆は渋川春海の貞享曆じょうきょうりきに始まり、宝曆曆ほうりきりき・寛政曆かんせいりき・天保曆てんぽうりきと続きますが、歳胤が関与したのはこのうち修正宝曆曆と言われるものです。当時の筆頭天文方渋川光洪は学力不十分で対応ができず、民間の学者千葉歳胤を用いて自らの不足を補ったといわれ、そのとき歳胤が著したのが蝕算活法率一八五卷（明和三年）でした。また、皇倭通曆蝕考は神武天皇元年から貞享元年までの二千三百四十年間について日食・月食を推算しています。さらに同統編では貞享二年から天保四年についても推算しています。筆者はその精度について若干調査してみました。宝暦曆よりは良いようです。

歳胤の著書は天文曆学に関するものがほとんどですが、筆者が確認したもののだけでも十六種類・総計三千九百頁を越す史料が遺されています。それらを一覧にしたものを表に示します。

このうち、『天文陰陽自然問答』は六十九歳、『再考積年日法術訂正』は七十歳、『一綫儀説』は七十三歳、そして『神道天文意弁』は七十五歳のときの著作です。当時の知識人としては陰陽五行説やそれが組み込まれていた記紀に基づく神道などは当然詳しく、その知識をもとに天文陰陽自然問答、神道天文意弁を著したと思われるが、老いても執筆意欲は旺盛でした。なお、礫川堂文庫には歳胤の『草莽夜話』『天文自然歳胤録』があったとされますが、調べて頂いた結果、戦災の影響が現存しないようです。あれば今少し歳胤のことが解明できたと思われませんが残念なことでした。

表 千葉歳胤の著書と所蔵先<sup>(2)</sup>

No	史料名	頁数	東北	天文	東大	国会	学士	伊能	天理	岩田	成立年	年齢
1	天文大成真遍三條図解 (注1)	34/29	○								宝暦8(1758)	46
2	天文残考集	146							○		宝暦8(1758)	46
3	大儀天文地理考(*)	26	○								宝暦9(1759)	47
4	改暦加減集(*)	20	○								宝暦12(1762)?	50
5	一葉儀術(*)	29	○						○		宝暦12(1762)	50
6	蝕算活法率(活法曆)(注2)	約2000(注3)			○	明治寺		○1冊	○	△	明和3(1766)	54
7	皇倭通曆蝕考	344	○	○		○		○3冊			明和5(1768)	56
8	皇倭通曆蝕考続編	22	○	○							明和5(1768)	56
9	歳寿万代曆	556		○		○					明和5(1768)	56
10	天文陰陽自然問答	20	○								天明元(1781)	69
11	再考積年日法術訂正(*) (注4)	17	○				○				天明2(1782)	70
12	一綫儀説	38	○								天明5(1785)	73
13	神道天文意弁	35	○								天明7(1787)	75
14	授時補曆経	582	○								明和3(1766)?	
15	推歩授時補曆月離附録月行率(*)	21	○									
16	求立・平定三差略術(*)	14	○									
	白山曆応編								応編曆?	△		
	割円八線之表									△		
	計	3904										

東北=東北大学図書館、天文=国立天文台、東大=東京大学図書館、国会=国会図書館、学士=日本学士院  
伊能=伊能忠敬記念館、天理=天理大学図書館、岩田=上里町岩田家。年齢は数え、(\*)は天文秘録集所収

(注1) これは林集書本だが、天文秘録集にも所収されている。

(注2) 伊能本(1冊)は「蝕算活法曆」、天理本は「活法曆」となっている。但し、名取文庫の天文秘書には存在する。

(注3) 国書総目録には明示されているが、調べて頂いた結果無しということだった。

(注4) 学士院所蔵本は「積年日法訂正」となっている。

△は未確認

歳胤の著書など天文曆学の評価については、「凡そ三十部一百有余巻、盛んなりと謂うべし」という評価はありますが、近世の天文学史の中で積極的に高い評価がなされている訳ではありません。『明治前日本天文学史』の本文には歳胤の名前は出て来ず、わずかに年表に五ヶ所ほど著書名が出ているのみです。それは、「渋川光洪を助け、独自の計算方法によって日食・月食に関して研究を進めた」のは事実でしょうが、光洪が関与した宝暦曆そのものの評価が低いことや、西洋天文学が勃興する時期にその方面の貢献がほとんどないことにもよるのでしょう。あるいは温順と言われる性格も影響したのでしょうか、歳胤が歴史の表舞台に踊り出たことはありませんでした。しかし、遺された著書から推測するに、歳胤が相当な人物・教養人であったことは間違いないことと思われまます。と同時に、歳胤はもつと研究されるべき人物であると思われまます。

歳胤の墓は虎秀にあり、高さ50cm、幅23cm程で前面に「寛政元酉年 乾道陽生信士 三月甫六日」とあり、右側面には「天文大先生 俗名 千葉陽生平歳胤 施主 浅見幸助」とあります。そして左側面には、



歳胤の墓 (飯能市虎秀) 2007年6月写



『天文大成真遍三條図解』にある陽生と歳胤の印 (東北大)



昔来し道をしほりに行空の

何迷べき雲のうへとて

とあります。悔いのない生涯だったのでしょうか。

なお、浅見家には歳胤の遺物として無銘の刀と衣類があったといわれますが、現存するものは衣類のみです。衣類は橘紋の付いた羽織、月星紋の付いた羽織、それに橘紋と月星紋の付いた着物の三枚が残っています。誰からか贈られたものなのでしょう。



月星紋の付いた羽織（浅見達男氏の好意で撮らせて頂きました）  
2007年6月写

### 三、児玉空々

（別項の「江戸宿谷氏の改易について」の宿谷氏系図参照）

空々については既に文献(1)で述べられていますので、本稿ではその補足的立場で稿を進めたい。

空々のことは辞書<sup>3)</sup>によれば、「江戸中期の代表的な琴楽家。田安徳川家の儒臣。名は慎、字は黙甫、通称喜太郎、空々は号。江戸に住む。琴楽は、孔子のころよりの七弦琴の古楽で、文人の四芸である琴棋書画のひとつ。日本では奈良・平安時代に行われて一旦消滅し、江戸初期に、徳川光圀に招かれた明の禅僧東臯心越によつて再興された。空々は和算家の幸田子泉に琴を学び、江戸牛込の安養寺で弟子百人を擁する琴社迎暎閣を興し、日本琴学の最盛期を招いた。空々が集めた多数の和漢の琴譜、琴書は田安家に保存され：。」とあります。



牛込の安養寺。近くには太田南畝が居住した地蔵坂や牛込天文台（新暦調御用所）跡がある。新宿区神楽坂、2010年9月写

七弦琴は文人がこよなく愛したもので、武家・儒者・画人・詩人にいたるまでおよそ文人と言われる人達の教養として流行り、浦上玉堂・佐久間象山・梁川星巖なども琴人でした。

この七弦琴の演奏の模様は文献(4)に、「琴士たちは相集い、琴を弾き琴を聴いて楽しむ。一般に琴会という。多くの聴衆が集って聴く今日の演奏会とは違う。それに琴楽は元来身を修めることを旨とする音楽であり、琴会は聖者・文人の集まりである。弾琴できない文人も聴きに來るが、文人に倅しない俗人は入れない雰囲気である」とあり、多少なりともその雰囲気わかります。

さて、前述の辞書の解説には「宿谷氏」の記述は出て来ませんが、文献(1)では稗田浩雄氏の資料を引用して江戸宿谷氏の墓所白泉寺の過去帳と断家譜などから五代嘉照が空々その人であるとしています。断家譜には「嘉照 喜太郎」とあります。

ここでは空々と宿谷氏を結びつけ、また空々の詳細がよりわかる史料を幾つか紹介します。

一つ目は国学者蜂屋茂橘（一七九五～一八七三）の『椎の実筆』です。この史料を知ったのは文献(4)からで、筆者が拝見したのは都立中央図書館に特別買上文庫として保存されているものでした。蜂屋茂橘は田安家に仕えた幕臣で博識で知られた随筆家でもありました。同書には空々について「宿谷空々翁勤書」（巻十二の十六）と「宿谷空々翁行状（空々宿谷先生行状）」（巻十四の二）の二箇所記述があります。

「宿谷空々翁勤書」は田安家での勤書で、全文は次のようなものですが実に十二回に及ぶ事績が書かれています。最後の添え書きには、「佐々布子爽蔵 空空翁真蹟の書付に就て写」とあり、空々自筆の書付を写しているようです。

## 宿谷空々翁勤書

私儀寛延四未年正月十八日新規被召出御切米現米十五石被下、小十人格奥御用相勤候様被仰付候、宝曆元未年十一月十三日御扶持方三人扶持被成下、同二申年九月二日小十人組被仰付高現米拾七石三人扶持被成下只今迄之通奥勤仕候、同五亥年正月十五日大御番被仰付高現米二拾五石五人扶持被成下只今迄之通奥勤仕候、同十辰年十一月廿六日御近習番並被仰付高百俵五人扶持被成下、同十二年六月廿一日病身ニ付願之通帰番被仰付高百俵被成下、明和七寅年十月七日御近習番見習被仰付高百五拾俵被成下、同八卯年七月十四日御前詰被仰付候、天明五巳年二月六日御近習番被仰付高二百俵被成下、同八申年五月十四日病氣ニ付願之通御普請入被仰付御用人支配ニ罷成候高現米二拾五石五人扶持被成下、寛政五丑年五月十四日御近習番格奥詰被仰付高百俵十人扶持被成下、同年八月表講釈被仰付候、同九巳年九月朔日於 御前小十人頭助被仰付外金五両被下置候、同年九月只今迄之通表講釈被仰付候、享和元酉年十月晦日頭役助被仰付候、文化三寅年十二月十五日奥講釈被仰付候、当末年迄御奉公五十七年相勤申候

二月十四日

宿谷喜太郎

佐々布子爽藏

空空翁真蹟の書付に就て写

次の「空々宿谷先生行状」は、空々の経歴書であるばかりでなく、空々の史論にまで及ぶ長文のもので、筆者には手に負えない部分も多いので、経歴的な箇所を抜き出して解読してみると次のようなものです。空々の実直さ・潔癖さが伺える内容です。(句読点・添字・振仮名は筆者、カタカナの振仮名は原文)

## 空々宿谷先生行状

先生姓宿谷有故て児玉を称す、老後本姓に改す、名慎、字黙甫、空々と号す、好浮屠（ふじゆ）て北山移文に取也、俗喜太郎と称す、幼にして才名あり、學術を以て少年偈を解て処士より田安府に仕へ禄を給ふ、始荻生叔達に学ひ、中頃中村蘭林に随ひ、末に新川土肥元成に従ふ、為人寡欲奇節あり、声色に於て甚淡し、家計少も不用心故に終身貧困セリ、学を務る人に過絶せり、所抄の書数百卷皆句読批点一見して先生の書たる事知るべし、琴を幸田親盈に学ふ、親盈ハ小野田東川に学ふ、東川ハ其在杉浦氏と共に投化僧心越に学ふ者也、先生於琴手法甚熟す、然共音公仄（おんこうへつ）にして不諧自ら不語弄彈（ぶごうだん）、終生云我琴に於而師伝の外分毫の私意なしと、然共或云少しく杜撰（ずせん）ありと、性甚潔を好ミ日々蚤起書堂を洒掃（しやく）し、漸塵（しんじん）を不留、案上（わすかに） 纒書（むす）一卷、読竟ハ龕（がんちゆう）中に収む、云世間の人書案の上累々数十卷、予四目両口三頭六臂にあらず、目の所接ハ一卷のミ、何ぞ多と為んと、抄書日課を立此書何千頁日課日課幾頁某年某日卒業すべし、其内少しく課を倍す、故に期に先だつ事幾十日にして訖（おわ）るべしと悦ぶ、無子辻村氏を養て子とす、其人腹中丁字なけれ共督責（とくせき）を不加、唯其意に任てやむ、云人の性強ゆべからすと、浮屠（ぶじゆ）氏を信し僧と遇する、厚し其法を尊信し常に仏理を説く、因果報応を論して高妙の理皆て及す、抄する所の仏書皆福田利益のミ、…(史論略)…老に至唯読書を知る外事一も心に経ず、人間百般の遊戯毫も知らず毫も解せず、一点風塵の色なし、輦轂（れんこく）下事を経世に熟し俗事に練習する人□□に在てハ、恰（あた）も僻境辺地田舎滯（おと）の如し、然共人品甚高温良□□礼法甚正し後輩鄙人（ひじん）に對すと雖毫も驕慢の色なし、故に人欽仰（きんきやう）す、狗を愛し常に座上に在らしめ、人怪て叱之則苦笑して罷む、机案の傍狗常に蹲踞す、泥□硯を灑（ぬ）せとも不問、潔癖な連共狗と臥起（がき）を共にして不厭、好てかわらけを嚙む、常に囊中に貯て座右に在り、咀嚼其津液（しんじやく）を吸土屑を吐立ツ、遠遊必携、云人の煙を好むか如しと、詩文其所長にあらず、詩ハ彫琢（ちやうたく）格調に論なし、其意を述てやむ読書稗官諛説（はいかんしやうせつ）といへ共句読□癸一字苟もせず、和点の誤句読の失必是正せざれば、不置一々塗抹改竄一字一語詳悉剖解し精密詳細、世間其比なし、老て氣力少も衰へず、読書謄写少年氣銳の時の如し、差病て数臥す、疾纒（わづか）三間なる時筆硯頃刻手を去らす、卒時享年七十七下谷玉泉寺先堂の傍に葬、

奇帙秘卷人来借時ハ少しく吝惜（りんしやく）の色なし、生面新識の人といへ共蔵を明て借与す、時立て借失すと雖

悔恨の色なし、(後略)

\*浮屠||仏陀。奇節||優れた節操。過絶||越えて優れている。音公||声と姿かたち。弄弾||楽器を奏すること。杜撰||誤りの多い。蚤起||早起。書堂||書斎。洒掃||清掃。案上||机。四目||よつめり三頭||さんづつ六臂||ありえないことを言っている(振仮名は合っているか自信なし)。督責||ただし責める。欽仰||尊び敬う。かわらけ||土器。津液||つば。所長||長所。彫琢||文章をみがく。吝惜||ものおしみ。

この文の大まかな意識は次のようなものです。

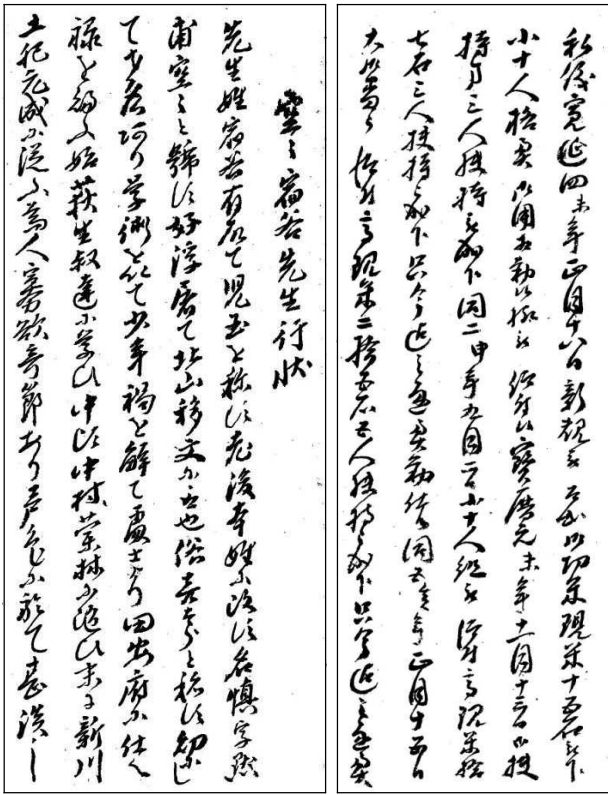
「先生の姓は宿谷、故有つて児玉を称し、老後本姓に戻した。名は慎、字は黙甫、空々と号す、仏教を好んで北山移文から取つたものである。俗名は喜太郎と称し、幼少から才名が聞え、田安府に仕へて禄を給つた。始め荻生叔達に学び、中頃中村蘭林に随ひ、末に新川土肥元成に従つた。人柄は寡欲で声色は淡く、家計に心を用いず終身貧困であつた。学に優れ数百の書を写し、句読訓点により先生の書であることがわかつた。琴を幸田親盈

に学び(略)、琴の手法に熟達していたが、音階には疎く弄弾のことは語らなかつた。性格は甚だ清潔を好み、日々早起して書斎を清掃し、机上には書一冊を置く。世人のように数十巻を累々と置くことはない。抄書する場合日課を立てて行ふ。子がなく辻村氏より養子を取つたが、この子は腹中に丁字もない(読めないということか)が、せめるようなことはせず、唯其意に任せていた。仏教を信じ福田利益ふくだんりやくの書を読んだ。(略)老いてからも唯読書ばかりで、人間百般の遊戯は少しも知らない。(略)礼儀正しく少しも驕慢さがなく故人から敬われた。犬を愛し、常に脇に置いた。人怪しんで叱れば苦笑するばかりであつた。潔癖だが犬と寝起きを共にした。好んでかわらけを噛み、常に袋に貯えて脇に置いた。噛んだ唾液を吸い土屑は吐き出した。遠出の際は必ず携えた。これは人が煙草を好むのと同じことだ。詩文は特に長所はないが、くだらない書でも句読点を一字もおろそかにせず、∴和訓の誤りを是正した。老いて気力少しも衰えず、少年の気鋭の時の如くであつた。病になつても筆硯を手放さなかつた。卒時七十七歳で下谷玉泉寺葬。

稀書を貸すときも物惜しみせず、はじめての人でも蔵を明けて貸した。時が経つて失われても悔恨の色がない(略)」

以上のような内容ですが、少し追記したい。

「故有て児玉を称す、老後本姓に改す」とはどういうことでしょうか。文献(一)では、「空々が本姓宿谷姓を名乗らぬ理由は二代尹行の家門改易に寄るもので元々児玉党の一族であるので世を忍ぶために用いた姓であるろう。琴士として名を成した後に本姓宿谷姓に復したものである」と述べられています。二代尹行よしかの改易は、寛政譜や断家譜などに結論のみ記述されていますが、その理由などは不明で謎めています(一章の「江戸宿谷氏の改易について」を参照)。改易は享保三年(一七一八)のことであり、長男富房、三男高久、富房の長男俊照も同時に改易となっています。つまり、二〜四代が改易という厳しいものでしたが、四年後の享



右：宿谷空々翁勤書〔部分〕 左：空々宿谷先生行状〔部分〕(椎の実筆より)

保七年には富房は改易御免となつています。空々の誕生はそれから十三年後ですが、武門にあつてはこの改易のことが後々まで影を落としていたということでしょうか。

空々の号は北山移文から取つたとあります。北山移文は中国南斉朝時代に孔稚珪（四四七〜五〇一）が書いた漢文で、調べてみると、「空空を釋部に談じ、玄玄を道流に覈らかにす」（空空の境地を仏教に求め、玄の道を道家に考える。つまり、空空は空を以て空を明らかにするなり、釈部は仏経を謂ふなり、覈は考なり、玄玄は玄の又玄を謂ふなり、道流は老子を謂ふなり）とありますが筆者にとっては難解です）との一節を認めることができます。

荻生叔達（一六七〇〜一七五四）は幕儒で徂徠の弟。空々が仮に十八歳の時師事したとしても二年後には亡くなっています。

中村蘭林（一六九七〜一七六一）は医官にして儒官。柴野栗山は宝暦三年に昌平校に入り蘭林に習つたとされています。空々も二十歳の頃昌平校で学んでいたのかも知れません。

新川土肥元成は土肥霞洲（二六九三〜一七五七）のことで幕府儒官、田安家にも仕え用人・番頭を歴任しました。亡くなつた年には空々は二十三歳になっていますからそれ以前のことになります。空々がこれら三名に師事したのはいづれにしても二十歳前後のことになります。

下谷玉泉寺先堂の傍に葬るとありますが、先述のように文献（1）には白泉寺とあります。確かに「江都諸名家墓所一覽」には下図のように白泉寺とありますので判断に迷うところです。なお

同宿谷空々、  
名帳字賦市稱喜太郎  
文化八年七月廿一日  
白泉寺

白泉寺を訪ねましたが、古いお墓は処分したとかで確認には至りませんでした。

二つ目の史料は、賞鑑家の浅野梅堂（一八一六〜一八八〇）の「寒檠瓊綴」にある空々についての次の記述です。

宿谷空々翁ハ崎人ニテ、常ニハ帯モシメズ牘鼻禪モセズ、人ト対スル時モ床ノ間ノ上ニ狗ノ寝テイタルコトナドアリ。机間座右ニハ土器ヲ幾枚モ積カサネテ、夫ヲボチボチト齧テ書ヲヨミ居タリ。伊川、東海ハソノ門人ニテ、梨ヲモ学ビツ。前ニ香案ヲ置、舟ニ鶴斂ヲ着テ、夜闌月明ナルトキ弾ジスマシヌ。又書ヲモ能セリ。

但し、梅堂が生れたとき空々は既に亡くなっていますので、この記述は一つ目の史料などを参考にしただけのものでしょう。

三つ目の史料は、大田南畝（蜀山人）（二七四九〜一八二三）の漢詩です。狂歌で一世を風靡した南畝は安養寺近くの地藏坂に居住し、同じく牛込に住んでいたと思われる空々と交遊がありました。南畝は空々に関する漢詩を寛政五年から空々の亡くなる文化九年までの約二十年間に九首程遺しています。それは空々五十九歳以降のことです。その内三詩を次に挙げてみますが、南畝と空々の関係はもつと調べてみる価値がありそうです。

- ・聞空々子彈琴  
空々子の琴を弾ずるを聞く 享和二年（還郷集）
- 高士横琴坐草萊  
高士琴を横たへて草萊に坐す
- 任他月色望難開  
任他れ月色の望み開け難きを
- 心閑手敏七絃上  
心閑かに手は敏し七絃の上
- 一曲秋風歸去来  
一曲の秋風歸去来

- ・賀空々先生宿谷慎増緑  
空々先生宿谷慎の緑を増すを賀す 文化九年（杏園詩集）
- 鶴髮宗藩一老臣  
鶴髮宗藩の一老臣

新加麩栗待常珍  
琴中乍瀉西江水  
恩沢洋々起涸鱗

新たに麩栗を加へて常珍を待つ  
琴中乍ち瀉ぐ西江の水  
恩沢洋々として涸鱗を起す

・空々先生 姓宿谷諱慎字子玉以七月廿一日逝

空々先生を哭す 姓は宿谷、諱は慎、字は子玉。七月廿一日を以て逝く

文化九年（杏園詩集）

心在江湖未扠衣

心は江湖に在つて未だ衣を扠はず

飄然逸気託音徽

飄然たる逸気音徽に託す

自今一曲広陵散

今より一曲の広陵散

万古千秋知者稀

万古千秋知る者稀なり

最初の詩は隅田川での船遊びであつたらしいです。二つ目の詩の「禄を増す」は空々が没する年のことで、無論先の空々翁勤書の対象外であり詳細は不明です。最後の詩の「七月廿一日を以て逝く」は、文献(1)に出て来る日と一致しています。

四つ目の史料には「宿谷」は出て来ませんが、寛政三年（または五年）十月十五日、白河侯の築地の下屋敷で催された琴碁書画の会の模様で、これはある人が郷里に報じた書簡の内容です。柴野栗山・谷文晁らの著名な文化人が出席しています。空々五十代後半のときのことですが、会の模様が具体的に書かれていて貴重です。（）内は筆者追加。

「一野生事も當十五日白川様御下屋敷御庭拝見被仰付、琴碁書畫之雅會有之、蒙御懇命左之面々出席二候

琴 田安様御内 兒玉喜太郎（児玉空々）

白川様家来

濱川又八

眞田様御内

永井虎之助

碁 水谷卓順

御儒者

柴野彦助（柴野栗山）

尾藤良助（尾藤二洲）

隠士

沼尻修平（沼尻龍涯）

門人白川御家来

長尾諫見

畫 谷文五郎（谷文晁）

谷末之允（谷元旦）

竹澤養溪（狩野派画家）

右之面々秋風亭にて書畫有之、

詩歌

白川御家来

小澤長伯

不破右門

吉村又一（松平家家老）

君公



右春風館にて御會、薄暮方より秋風亭之面々不殘春風館へ集合、御泉水にて船を泛べ、管絃有之、館上にて筆算を和韻す。此時眞に人間を去り候ころなり。御庭中亭の数七ッほど、暮は別亭にて相會候故、小子等は不知、朝四時より夜四時まで歓樂を極申候（後略）

その他の史料としては田藩文庫に空々蔵の琴書があり、現在は国文学研究史料館に保存されています。文献(4)によれば田藩文庫には三十五種類の琴書があります。その一つ「幽蘭譜」を拝見しましたが、琴書独特の減字譜と難しい漢文のため門外漢の筆者には残念ながら解読できませんでした。ここでは参考に「幽蘭譜」にある直筆と思われる「此ぬし児玉喜太郎」の文字と空々居士の印を転写しておくに止めます。



また、空々の著作には、漢籍の「五雜俎」（明代の自然・社会現象について記述）に倣った『五雜俎翼』（無窮会神習文庫）四冊があります。未完に終わったといわれます。筆者は未見ですが、空々を知る上では今後の課題でもあります。

なお、江戸宿谷氏の系譜は、太郎左衛門道重三男尹宅（宿谷地藏尊建立の重本の弟）が初代で、二代尹行、三代富房、四代俊照と続き、五代嘉照が空々です。空々の戒名は「寛隆院義山空々居士」です。

#### 四、幸田親盈

幸田親盈は武州埼玉郡八條領中馬場村（現八潮市）の領主で、百五十石の旗本でした。『寛政譜』には要約次のようにあります。

親盈 友之助 實は酒井雅樂頭家臣中山十左衛門親繁が男。正信が養子となる。正徳二年六月十五日家を繼、三年六月十八日小十人となる。采地武蔵國埼玉郡のうち百五十石 元文二年六月十一日組頭にすゝみ、寛延二年十月二十七日西城切手御門番の頭に轉じ、寶暦二年十二月七日西城御廣敷の勤番をつとめし賞として黄金一枚をたまふ。六年閏十一月二十七日務を辭し、八年十二月八日死す。年六十七。采地中馬場の妙光寺に葬る。

酒井雅樂頭は前橋藩主であり、西城切手御門とは大奥の入口門のことを指すようです。親盈は中根元圭の暦学を継承した人で、『白山暦解義（授時暦正解）』（元圭の白山暦の解義）、『推積年日法術』『天文大成』等の著がありますが、『増修日本数学史』には、「中根元圭が門に在って、肅々たる者とす。門人頗る多し。彦循（元圭の子）と共に中根流派に幹たり」、「人呼んで中根流の算士と曰う。その名當時に振う。門弟に幕臣多し。彦循と共に中根流の骨髓たり」とあり、算者としての評価も高いです（尤も天文暦学者は皆算者であった）。

歳胤は、『大儀天文地理考』『改曆加減集』などの序や引、あるいは本文冒頭で「幸田親盈先生門人 千葉歳胤」などと記述していますし、『天文大成真遍三條函解』の序の中では弧矢の問題について親盈との関係を述べています。また『天文残考集』の序の中で「親盈先生ノ門ニ遊フト年久シウシテ」とも述べていますが、親盈側からの歳胤の記述は残念ながら見つかありません。



幸田親盈の墓（中央）  
（妙光寺：2007年5月写）

一方、文献(4)には親盈について次のようにあります（重複は省略）。

字は子泉。三人の子親平、親安、親住はみな田安德川家（琴士児玉空々を出す）に仕えた。子泉は中根白山（元圭）に算学を修め、暦学に善く、幕府の暦術家となる。（略）若年より琴を小野田東川に学ぶ。頗る伝を極めたというから、「東臯琴譜」の大多数の曲を修得したのであろう。厳密な朱子学者であったので、仏徒の曲「釈談章」を敢えて弾ぜず、「帰去来辞」（陶淵明の詩）も心越の曲譜を用いず、明の楊搢の「太古遺音」の譜を使うことをした。珍しいことである。心越の用いた琴譜（一曲ずつを一冊に書いたもの）五十余曲分と琴書（恐らく中国の琴書）数部……等を所有していた。五十曲といえ、**「東臯琴譜」**の全曲に近いものである。「田安德川家蔵楽書目録」に見える四十九曲を収めた「東臯琴譜」は「幸田子泉旧蔵」と朱筆のある児玉空々蔵本である。

子泉は琴学上の号であり、ここにある子泉旧蔵と空々蔵本は、先の田藩文庫に保存されている空々蔵の琴書です。

このように親盈は算学天文暦学の他に、音曲にも相当造詣が深かったことが伺い知れます。そして天文暦学の門人が歳胤であり、琴学上の門人が空々でした。

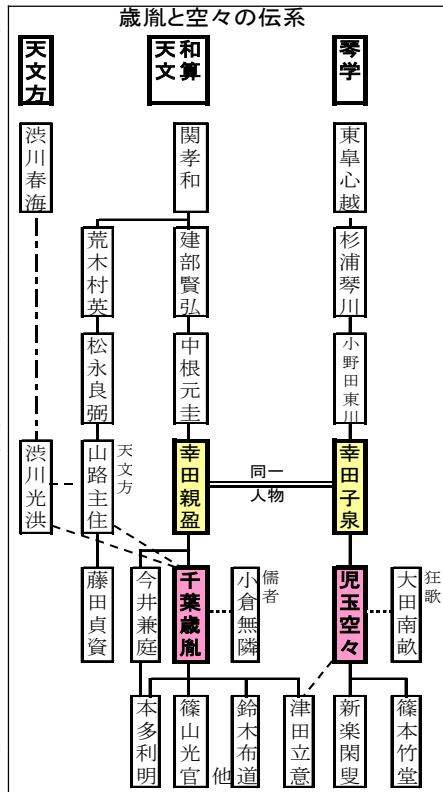
なお、親盈が没した宝暦八年のとき空々は二十四歳ですから、師事した期間は長い間のことではなかったかも知れません。

### 五、おわりに

歳胤と空々を直接結びつけるものではありませんが、文献(4)には空々門人の新楽閑叟（一七六四〜一八二三）による「閑叟雑話」のことが書かれていて、その中に琴社諸友記というのが記されています。その琴社諸友記の名簿の中に「津田立意」なる人物の名があります。この津田立意は歳胤とともに『一綫儀説』を著した津田立意源東樹のことと思われる。つまり、歳胤の門人である津田立意は天文暦学と同時に七弦琴を習い（空々の門人であったかは不明）、空々の琴会に参加していたということでしょう。

\* \* \* \* \*

歳胤と空々とはこのように分野こそ違いますが、幸田親盈という優れた人物を共通の師とし、共に中央で活躍しました。しかも、歳胤の故郷である飯能市虎秀と、空々の先祖である宿谷氏の本貫地毛呂山町大字宿谷とは直線距離でわずか4 kmに満たない山一つを隔てた位置関係にあります。歳胤は空々より二十才程年上ですが、歳胤が主著である蝕算活法率や皇倭通曆蝕考を著した頃、空々は牛込の安養寺での琴会を盛んにして行く頃です。それは歳胤五十代、空々三十代の頃です。安養寺のすぐ近くには牛込天文台があり、歳胤と天文方渋川光洪の関係からすると歳胤はこの天文台に通ったことも推測でき、歳胤と空々の活動拠点は案外近かったのかも知れません。歳胤が音曲に興味があったとか、空々と会ったとかいうような記録は見つかりませんが、津田立意のことを考えると、立意を介して知り合う機会もあったのではないかと想像したくなり、歴史のロマンを彷彿とさせるものがあります。



（謝辞）「宿谷空々翁勤書」「空々宿谷先生行状」の解説には、羽村古文書研究会の清水浩先生にご教示をいただきました。記して御礼申し上げます。

千葉歳胤と児玉空々

千葉歳胤・児玉空々の年表

西暦	和暦	親盈	歳胤	空々	歳胤関係	空々関係
1691	元禄4	誕生			幸田親盈誕生	
1704	宝永1	14			山路主住誕生	
1713	3	23	誕生		(歳胤)誕生	
1716	享保1	26	4		吉宗将軍となる	
1718	3	28	6			江戸宿谷氏2代尹行3代富房4代俊照改易
1722	7	32	10			宿谷富房改易御免
1723	8	33	11			宿谷氏2代尹行没す(英雄院)
1730	15	40	18			
1731	16	41	19		(歳胤)この頃元圭に入門か	
1732	17	42	20		申根元圭下田観測。幸田親盈八線表解術意	
1733	18	43	21			
1734	19	44	22		幸田親盈推積年日法術。藤田貞資誕生	
1735	20	45	23	誕生		(空々)江戸宿谷氏5代嘉照(児玉空々)誕生
1744	延享1	54	32	10		
1746	3	56	34	12	神田佐久間町に天文台	江戸宿谷氏4代俊照(空々父)没す
1748	寛延1	58	36	14		
1750	3	60	38	16	渋川光洪天文方となる	
1751	宝暦1	61	39	17		(空々)現米15石小十人組3人扶持。
1752	2	62	40	18	幸田親盈黄金1枚給う	(空々)現米17石小十人組3人扶持。
1754	4	64	42	20		
1755	5	65	43	21	渋川光洪黄金五枚賜う。宝暦曆施行	(空々)大御番現米25石5人扶持。
1756	6	66	44	22	幸田親盈職を辞す	昌平校に学ぶ
1757	7	67	45	23		
1758	8	渡68	46	24	(歳胤)天文大成真遍三条図解、天文残考集	この頃、篠木竹堂と琴の研究
1759	9	47	25		(歳胤)大儀天文地里考	
1760	10	48	26		光洪邸で山路父子・定資・歳胤会う	(空々)御近習番100俵5人扶持。
1761	11	49	27			江戸宿谷氏3代富房(空々祖父)没す
1762	12	50	28		(歳胤)一葉儀術、改暦加減集	(空々)病身に付帰番高100俵。
1763	13	51	29		9月1日の日食不載の日	
1764	明和1	52	30		山路主住天文方	
1765	2	53	31		牛込天文台できる	
1766	3	54	32		(歳胤)触算法率・授時補曆経	
1767	4	55	33			安養寺琴会
1768	5	56	34		(歳胤)歳寿万代曆・皇倭通曆蝕考	
1769	6	57	35			
1770	7	58	36			(空々)御近習番に復し150俵。
1771	8	59	37		渋川光洪没す。修正宝暦曆施行	(空々)御前詰
1772	安永1	60	38		山路主住没す	
1773	2	61	39			
1781	天明1	69	47		(歳胤)天文陰陽自然問答。藤田定資・精要算法	
1782	2	70	48		(歳胤)再考積年日法術訂正。天文台浅草に移	
1783	3	71	49			
1785	5	73	51		(歳胤)一綫儀説(津田立意と共著)	(空々)御近習番200俵
1786	6	74	52			
1787	7	75	53		(歳胤)神道天文意弁	
1788	8	76	54			(空々)御普請御用人支配現米25石5人扶持
1789	寛政1	没77	55		(歳胤)没す	
1793	5		59			(空々)御近習番格奥詰100俵10人扶持表講積
1794	6		60			
1797	9		63			(空々)母没す。御前小十人頭、金五両下賜
1798	10		64			
1801	享和1		67			(空々)表講積の頭
1802	2		68			太田南畝空々の漢詩を読む
1804	文化1		70			
1806	3		72			(空々)奥講積
1807	4		73			
1812	9	没78				(空々)没す。太田南畝空々の漢詩を読む

(注) 年は連続ではなく歯抜けになっています。

【参考文献】

- (1) 山口満「続 宿谷氏の賦」(毛呂山郷土史研究会『あゆみ』第12号)
- (2) 山口正義『天文大先生 千葉歳胤のこと』(まつやま書房 2009年)
- (3) 『朝日 日本歴史人物事典』(朝日新聞社 1994年)
- (4) 岸辺成雄『江戸時代の琴士物語』(有隣堂印刷 平成12年)
- (5) 蜂屋茂橘「権の実筆」(都立中央図書館特別買上文庫)
- (6) 竹田晃『文選(文章篇)中』(明治書院 平成10年)
- (7) 『続日本随筆大成3へ寒檠環綴』(吉川弘文館)
- (8) 『大田南畝全集』(岩波書店 昭和60年〜平成2年)
- (9) 『森銚三著作集第三卷』(中央公論 昭和48年) 谷文晁の研究 301〜304
- (10) 『幽蘭譜』(田藩文庫、現在は国文学研究史料館に保存されています)
- (11) 「江都諸名家墓所一覧」国立国会図書館、下記URLで見られます。 <http://kindai.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/900081>

『あゆみ』第36号、平成25年3月